

六月のテーマ 親の子、子の親

孝を 忘れた 現代

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九）のこぼれ話を掲載します。



え・城谷俊也

【目】 分は親孝行者だ」とうぬぼれている人は、まずい

であろう。しかし「自分はどのように親不孝者だ」とみずから恥じ入っている人がいるだろうか。それも「この点が、こういうふうには、まだ孝行になっていない」と具体的に省みている人が、はたしてどのくらいいるだろうか。

例えば朝起きたときに「今日は、このように行動して親の希望にそっとうようにしよう」とか、夜やすむときに「今日はどのくらい親の願いを活かすことができたであろうか」とふりかえってみる。こうした実践をしているであろうか。

また、何かで蹉跌（さつてつ）をきたしたり、問題が生じて迷ったとき「親の志をたてるとすれば、こっうやったほうがよいのでは」と、解決の手がかりをそこに見出だすようにしたことがあるだろうか。

「何と堅苦しいことか。そんなのはごめんだ」などと反発されるかもしれない。けれども、ここで言いたいのは「親孝行なんか誰でも適当にやっているよ」とか「何

も悪いことはしていないんだから、孝行などとりたてて目くじらをとる必要はない」などと、うそぶくような態度はやめたまえということなのだ。

自分の生命を感謝するならば、その生命の元（基）である親に感謝するのは当然である。また建築でも基礎（もと）をなしている土台を大切にしないと家は成り立たない。スポーツ、芸ごと、勝負ごと、芸術品の制作その他、何でも基本動作、基礎的作業がもつとも大切で、これを無視してはすべて成立しない。わが生命の元である両親を粗末にし、ないがしろにして、どうしてわが生命活動が健全になされるであろうか。親を無視すればするほど、馬鹿にすればするほど、我が生命はガタガタに崩壊していくのである。

親子といっても思想や趣味や生き方その他、違いがあるのは当然だし、親の希望と子の希望が異なる場合もあり得る。しかし子ども自身としては、なるべく親の希望通りにすることを第一に志すのが

よい。頭から親の望みを否定して、自分の希望だけをおし通しても、うまくはいかない。親の希望をまず受け入れ、どうしても自分はいやりたいというのであれば、その時よく話し合いをして許してもらうべきである。まず子としては、スナオに親の心を理解しようと、すぐに省みるべきだ。

親自身としては、子に対して感情的になったとき、まず自分の親に対して、自分はどうであったかをふりかえることだ。このふりかえりが「倫理」なのである。

もし自分は親の言うことはよく聞いたが、それに比べてわが子は何という親不孝者だとわが子を非難するような気持ちがあったとしたら、それは間違いだ。自分の気がつかないところで、わが親に対して、そむいていたことがあったに違いないとふりかえり、わが子がわが行ないを実演しているものとみる。何よりもまずわが親への孝の足りなさを思うとき、わが子への真の愛情が湧き出るのである。

『世紀の歩調』より